

まんだら通信

第215号 (通巻250号)

平成26年05月 西暦2014年 佛曆2580年 皇紀2674年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

自治体という家族

長尾川下流にかかる、通称『めがね橋』。長さ二八呎、幅四呎の石造りアーチ型のこの橋は、明治二年三月竣工ということですから、百三十年近く昔ということになります。

村民の寄付金三百九十九圓四十銭と、地元の石工さんによって完成したということですね。材料の石の殆どは、近くの海岸の『みずるめ』の石を切り出したものだそうです。この金額は、当時の六十キロの俵三百俵に当たるそうですが、維新後二十年足らずで、今と違って現金収入のあまりない時代でしたから、皆さんの心意気が並々ならぬものだったと分かります。

戦後、百呎下流に現在の長尾橋ができるまでは路線バスや戦車も通りましたか



ら、安房中や安房高女に通った人は、毎日この橋のご厄介になっていたのですね。その後、『日本の名橋百選』や、千葉県指定の有形文化財に指定され、二十年前から七千万円をかけて大規模な修復をし、大事を取って徒歩でしか通れるようになっていますが、付近も公園風に整備されて、カメラ自慢の観光客も訪れる名所になりました。今の季節は、地元の青年たちによってこいのぼりが泳ぎ、暮れから正月にはイルミネーションが輝き、インターネットで紹介されるなど、ちょっとした名物になっていますね。

また明治五年には、今のような学校制度が発令され、それまで寺子屋として使われていた川下の観乗院や、のちに紫雲寺と合併した、本郷の西福院などを仮校舎として、『滝口尋常小学校』が発足しました。その後手狭になり明治二九年に学校を新設しましたが、この時の費用も村民の寄付で賄われたと聞いています。

その頃の政府には、地方に回すお金の工面などとても出来なかつたという事情はあつたはずですが、自分たちのことは自分で賄うという気概が住民にあつたからだと、私は思っています。

戦後の日本は世界一の貧乏な国になりました。外国に売って稼ぐような天然資源がない日本は、働くことでしかお金を集める方法がありません。そして、気付いた時には勝った国々を差し置いて、経済大国になっていました。而も世界の、殊に有色人種の国の信用が一番です。

では当たり前ではないという証拠が、日本が経済大国になった理由なのです。さて、新しい南房総市ができて今年で八年目になります。国は広域の合併を進めるため十年を区切って、財政的なあめ玉の優遇制度を作りましたが、あと二年で約束の十年目になります。先日、『房日新聞』によると、その時南房総市は日本一の貧乏な市になると書いてありました。

何故でしょうか。「汗を流して働くことが好き」、「約束は必ず守る」などなど、当たり前前と私たちが思っていることは、世界

同じような意味で、南房総市は一軒の家です。市そのものが少しでも元氣を取り戻してほしいと思つた時、家族の私たちに出来る方法として『ふるさと納税』という制度があります。大ざっぱに言うところに入つた自治体に寄付すると、確定申告の時、その金額の大部分が税金から差し引かれるという制度ですね。

「白浜には市営のバスが来ない」、「合併して不便ばかり多くなつた」、「白浜はいつもおいてけぼりだ」、「まだまだ無駄が多い」と不満が多いことは、私とて百も承知しています。でも、まさか不仲の夫婦ではあるまいし、「いつそ離婚だ!」というわけには行きません。

先月、市長・市議会議員の選挙がありました。無投票三選の市長さんと、二〇人の新議員さんに選挙管理委員長として当選証書を手渡す式に出ましたが、「皆さんの任期半ばにはその十年目の正念場が来ます。風光明媚な南房総市を、子孫にしっかりと誇りを持って手渡すために、毎日が選挙運動と思ひ、住民の先頭に立つて励んでください。」と、異例のお願いをしました。

「白浜には市営のバスが来ない」、「合併して不便ばかり多くなつた」、「白浜はいつもおいてけぼりだ」、「まだまだ無駄が多い」と不満が多いことは、私とて百も承知しています。でも、まさか不仲の夫婦ではあるまいし、「いつそ離婚だ!」というわけには行きません。

▼風薫る…なんと心地よい言葉でしょうか。まさに昨日今日の陽気を言い当てています。山ではマテバシイ(とうじい)の新緑が、萌え上がるという言葉そのままに、まぶしいほどです。もう少しすると少し違った色合いでシイの若葉が後を追います。▼今、日本中で『ふるさと納税』が大はやりです。南房総市は市長さんの丁寧なお礼状が届きます。本来はこれで宜しいのですが、夕張市は1万5千円で夕張メロン1個を、群馬の上野村は1万円でキノコやイノブタを、お隣の館山市ではお礼として季節の花や房州うちわなどを用意しています。

中には宮崎県のある町は300万円の寄付で宮崎牛1頭分と発表したところ、わずか数分で予定の3頭分が「売り切れた」と産経新聞の記事にあります。やはり世の中常識というものがあつた気がします。お礼はあくまでもお礼ですから。そうではありませんが、『日本一の貧乏市』というお墨付きがあるならば、もう少しなりふり構わぬやり方をしても良いような気がします。例えば市のホームページを見ても、館山市と違ってどこにふるさと納税の入り口があるのかわかりません。すぐにも分かりやすい入り口を作してほしいと思ひました。

▼私も立派な“痴ほう候補”。朝早く、よそのお宅に上がり込んでお茶を飲んでいたりして。「お宅のジイさん、うちでお茶飲んでるから心配要らないよ。」なんて電話が来て。こういう暖かい地元っていつまでも続いてほしいですね。▼今月の野草はホタルカズラ【ムラサキ科ムラサキ属】です。鮮やかな瑠璃色を蛍の光りに見立てたからだそうです。このブルーの色は印刷ではなかなか再現できないので、実物を見て戴くしかありません。草丈は15~30センチ。花の大きさは2センチ足らず。日当たりのよい明るい草地进行で好むよう多年性です。

▼今月の野草はホタルカズラ【ムラサキ科ムラサキ属】です。鮮やかな瑠璃色を蛍の光りに見立てたからだそうです。このブルーの色は印刷ではなかなか再現できないので、実物を見て戴くしかありません。草丈は15~30センチ。花の大きさは2センチ足らず。日当たりのよい明るい草地进行で好むよう多年性です。



余滴

につぼん人情小噺

三遊亭鳳皇

第一〇〇話 命の花見

今年の三月三十一日のことでした。上野公園に三人の男が集まりました。ひとりには、元大学教授の松本肇さん。もうひとりには私。そして、最後のひとりが大辻慎吾さん、東映の元俳優です。私が、大辻さんとお会いするのは三回目、松本先生とはじめてでした。大辻さんと松本さんも、それほど親しくはないように私には見えませんでした。

時間は、まだ夕方の五時です。「ちょっと、そこで飲みますか?」

三人は静かに繁華街の方へ歩きはじめました。それほど深い関係のない三人が、なぜ会うことになったのか。それは、大辻さんのこれまでの人生に松本さんと私が共感したからでした。

私と松本さんを結びつけた一冊の本があります。大辻さんがお書きになった自伝『赤落ち』です。「赤落ち」とは、一審、二審と無罪を主張し、検察と戦いながらも、二審で有罪の判決が出ると、最高裁への控訴を諦め、刑務所に入ることを表す刑務所言葉だそうです。

ということ、この著者、大辻慎吾さんは単なる元俳優ではなく、「前科者」だということです。その犯罪も、本によれば、強姦致傷の罪です。彼は、そのため、四年間の刑務所生活を送ったのです。なぜ、大辻さんは一審、二審と無罪を主張したのかは、自伝のなかに詳しく書いてありますが、いわば、彼氏持ちの女性に手を出したため、その女性が結婚を約束している彼のために言い逃れをしたことで、大辻さんは、加害者にされたようです。

三重刑務所、名前なし、囚人番号七百七十三番。それが大辻さんの呼び名でした。刑務所初日、職員が中央の机の上にあぐらをかき、七十人ほどの囚人が整列して監視をするなか、大辻さんから新しく刑務所に入ってきた者は五十メートルもある廊下を乾いた雑巾で十往復も乾拭きさせられました。ある者は目から泡を吹き、またある者は激しく咳き込むと、一気に血を吐いたそうです。

そして、これが三カ月の間、毎朝続いたと言います。これを刑務所では「地獄の一丁目」と言うのだそうです。

そして、囚人番号七百七十三番は、四年の間に何十人という仲間の死体を目にしますが、その八十八%は引き取り手がいないことも知ります。そうした男たちは、刑務所内の無縁仏の墓に埋葬されるのだと気がつきます。また、囚人頭に嫌われら最後、食事当番によつておかずが奪われ、トイレで尻を拭く紙も半分になることもわかりました。また、囚人のなかに刺客がいて、理由はわからないまま、殺されそうになったこともあったそうです。

そして四年、大辻さんは晴れて刑務所を出所しました。

その後、大辻さんは茨城県の龍ヶ崎というところで、焼き鳥屋さんをはじめました。

見知らぬ土地で、「前科者」がはじめた焼き鳥屋です。それでも、地獄を味わった元俳優にとつては、人の情けが身に染みたのでしょう。恩返しとばかり、地元の人たちの人生相談に乗ったりしているうちに、市役所の人たちにも知られるようになります。「酸いも甘いもわかる焼き鳥屋さん」として、市内では知られるようになりました。

そのうち、自伝を書かないかという誘いに乗って書いたところ、自費出版だと言われ、二百万円要求されたそうです。大辻さんは黙って要求を飲み、知り合いから借金をして払いました。だが、本も出ないうちにその出版社が倒産。また、金を借り、別の自費出版社から出したのが、『赤落ち』でした。

その借金は、何年もかかって返したそうです。私は、なんだかこの元俳優に会いたくなって、五年前、龍ヶ崎を訪ねました。大辻さんは、実に苦味ばしつたい男でした。名優ユル・ブリンナーを日本人にしたような顔で背も高く、「いらっしやい、何にしますか。」という低い声がまた魅力的でした。

その時、大辻さんがこうつぶやいたのが忘れられません。

(噺家さん、俺、もう一度だけでいい、人の前で芝居がしてえ……)

元筑波大学教授の松本さんも、龍ヶ崎市内で買った『赤落ち』に感動して、酒も飲めないのに、大辻さんの焼き鳥屋さんのをのぞいたのがきつかけだったそうです。そして、何度か通つていっているうちに、役者としての夢を聞いたのだそうです。

それでも、大辻さんは、刑務所を出てから十数年間、俳優を諦め、ずっと地味に働いていましたが、二年ほど前、原因不明の病気で左半身が麻痺し、仕事ができなくなつてしまいました。

(ああ、とうとう、俺も終わりだ。一生懸命生きてきたけど、かあちゃん、もうダメだ) 大辻さんは、何年も前に亡くなった北海道のお母さんのことを思い出していました。父親が早く死んだので、少年の大辻さんを連れて再婚したお母さんは、いつも義父に殴られていたと言います。

中学を卒業した大辻さんは、仕事を求めて上京します。その時に、母が持たせてくれた三個の塩むすびがいまでも忘れられないそうです。大辻少年は、そのおむすびを食べます。

一個目は青森から汽車に乗つてすぐに、二個目は「まもなく上野です」というアナウンスを聞いた時、そして最後の一個は、上野に着いて寝る前に食べたそうです。

それから、キャバレーのボーイからはじまり、転々と職業を変えているうちに、演劇の世界に入り、奇人と言われた二代目大辻二郎の弟子になり、大辻慎吾の名前をもらい、その彫りの深い風貌から悪役として東映映画で活躍をはじめた矢先、女性にひつかかってしまったのです。

今年の十二月で古希を迎える年になるその大辻慎吾さんが、いま、再起をかけてリハビリをしていると電話で教えてくれたのが、松本さんだったのです。

「じゃあ、上野駅で三人で会いましょう」

ということになり、全員集合となったのです。

「大辻さん、ひとり芝居をやりませんか、台本を書くのが松本さん。僕もできることはしますよ。みんな、人生の最後の力をふりしぼつて、やりましょうよ。」

「いいですね、僕も教授を退官になつて数年、このまま何もしないで死にたくない。大辻さん、絶対、やろうよ。もう一度、お互い、自分の人生の最後の花を咲かせようよ。」

冷静沈着な松本さんが珍しく興奮してそう言うのと、大辻さんは動く右手で目頭をぬぐつて、こう言いました。「噺家さん、俺の芝居をぜひ見てほしい人たちがいるんだよ。」

「誰ですか。」「龍ヶ崎市の役所の人たちだ。普通、市役所の人たちは、前科者なんか相手にしないよ。だけど、あの人たちは本気で俺の相談に乗つてくれるだけでなく、励ましてくれるんだよ。がんばれ、負けるなつてさ。だから、俺、必死でリハビリがやれたんだ。だから、どうしてもあの人たちに、がんばつて生きていく俺を見てほしい。噺家さん、ありがとな。生きる勇気をくれて。今日は、いい花見になった。命の花見だ。」

ふと、私は、友人の俳優、柄本明さんが言った言葉を思い出しました。「僕はね、これまでやつてダメだったこと、失敗したことはいくらでもあるけど、やらないほうがよかつたということ一度もないよ。」

(よし、もう一度、突っ込んでボールを奪いに行つてみるか!)
元ラグビー部の私は、ふたりと別れたあと、上野の山の夜桜に向かつて、そう叫んでいました。